



## 特集にあたって

著者	松久 玲子
雑誌名	社会科学
巻	46
号	1
ページ	1-2
発行年	2016-05-30
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014471">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014471</a>

## 特集にあたって

第 18 期第 14 部門研究会代表者

松 久 玲 子

本特集は、2013 年度に発足した同志社大学人文科学研究所の第 14 部門研究「ラテンアメリカにおける国際労働移動の比較研究」の研究成果の一部である。同研究会は、期間内に計 25 回の研究会を行い、ラテンアメリカ地域の域内・域外の国際労働移動の現状を把握し、労働のグローバル化におけるラテンアメリカ地域の特徴、および問題点を明らかにしてきた。研究会では、さまざまな角度から労働を目的とした移民問題に関する報告を行い、メキシコおよび中米からアメリカ合衆国へ、中米からメキシコへ、そして南米からスペイン、日本へのラテンアメリカ域内・域外の労働移動の状況、送り出しコミュニティと受入国に滞在する移民とのトランスナショナルな関係についての理解を深めてきた。本特集は、これらの成果の一部を公開するために企画したものである。

グローバル化とともに新たな国際分業体制のもとで、国境を超えた労働力の移動が急速に増加している。20 世紀半ばまでに形成された国際分業体制（先進諸国—工業製品の輸出 / 第三世界—資源供給）は、従来先進工業国に集中してきた製造業が安価な労働力を求め、大規模に途上国、周辺地域に移転する生産の再配置という新たな局面が 90 年代までに出現し、さらに 2000 年以降、生産労働だけではなく、再生産労働が商品化され国際化する、つまり国境を越えた労働力移動の第三局面に達し、現在国際分業体制の 3 つの局面が同時進行している。この新国際分業の進展は経済のグローバル化を受け入れた諸地域に伝統的経済構造の変質と文化的変容をもたらしている。最近の研究では、主に「南」の発展途上国からアメリカ合衆国やヨーロッパなどの「北」への国際労働移動が注目されているが、2007 年の ILO 調査によれば「南」からの国際労働移動の約半分は南から南、発展途上国間の移動である。

ラテンアメリカでは、20 世紀初めから主に季節労働を目的として南から北への国境を

越えた労働移動が始まっていた。しかし、近年移住人口が急速に拡大しているとともに、貧しいラテンアメリカ諸国から豊かなアメリカ合衆国という構図だけではなく、ラテンアメリカ諸国間、あるいはヨーロッパへとその移動の範囲も多様化している。特集は、メキシコからアメリカ合衆国への移民に関する論説1本とアメリカ合衆国のヒスパニック組織に関する研究ノート1本、移民送出国であると同時に移民受け入れ国であり、「北」への移民中継地であるメキシコにおける中米移民問題を扱った論説と研究ノート各1本、ラテンアメリカからスペインへ、日本への移民に関する論説各1本から構成されている。メキシコからアメリカ合衆国への移民を扱った論稿では、戸田山が1950年代のメキシコからアメリカ合衆国への季節労働移民（ブラセロ）に関して法的側面からとりあげている。佐藤は、1980年代のヒスパニック移民組織であるLULACを取り上げ、ラテンアメリカからの不法移民が増加する中でのラテン系アメリカ人のアイデンティティの問題を論じている。メキシコへの中米移民を扱った浅倉は、メキシコで再生産労働を担う家事労働者を事例として、女性たちの多様な家族統合のあり方を論じている。柴田は、これら中米移民を含めたメキシコ政府の出移民に関する対応政策を論じている。他に、深澤はアメリカ合衆国による不法移民管理に伴い近年増加している南米からスペインへの移民に対するスペイン政府の対応について、また、ビターレは、日本におけるラテン系移民のマスキュリニティが職場と家庭でどのように変容し再構築されるかジェンダーの視点から論じている。

以上、本特集では多様化するラテンアメリカ系移民を研究対象とし、受け入れ国の政策および近年の傾向である移民の女性化現象に伴う問題を扱っている。ラテンアメリカからの域内、域外への労働移動の事例を研究することにより、グローバル化により加速化された国際分業体制への理解を深めたい。